

学士課程教育の再構築に向けたFD活動の実質化 —組織的FD活動と教育の質保証—

小川 勤 ・ 岩部浩三 ・ 吉田香奈
(山口大学 大学教育センター)

1. 大学教育センターと各部局が一体になった「教育改善FD研修会」の開催

山口大学では平成20年度に大学教育センターが申請した「目標達成型大学教育改善プログラム」が文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（以下教育GP）」に採択され、現在、全学的な規模で学士課程教育の再構築に取り組んでいる。この中で中心的な取組が大学教育センターと各部局とが一体になった「教育改善FD研修会」の開催である。今回の発表はこの研修会の意義と研修内容およびその成果について発表を行なう。この研修会では学士課程の再構築を目指して、グラジュエーション・ポリシー（以下GP）やカリキュラムマップ（CUM）を学部・研究科単位で再点検するとともに、各科目のGPに対する貢献を明示する。さらに、その順序性や関係性を明らかにするためにカリキュラム・フローチャート（以下CFC）を作成するワークショップを通して、学士課程教育全体を俯瞰的に見る経験を通じて、各学科・課程・コース単位でCFCの策定を通して、組織的なFD活動を推進することをめざしている。

2. 教育改善FD研修会の目的と必要性

この研修会開催の目的は教育改善の実質化を図ることにある。教育改善の実質化とは、人材養成目的に合った合理的なカリキュラムの実現であり換えることができる。従来のカリキュラムが教員の専門分野を中心に、いわば教員の視点から構成されたものであったことは否めない。現状ではGPで示される学生が卒業時に身につけている資質は、カリキュラムが直接保証する学士の必須要件というよりは、偶発的に得られる間接的な成果に過ぎなかったと言えるかもしれない。その結果として、各所にさまざまなミスマッチが生じてきたのも事実である。入学者の多様化と平均的な習熟度の低下に対応するには、教員が独自の授業を展開するだけでなく、誰が何をどこまでどのように教えるかという組織的な連携が求められるようになってきている。そもそもこのように有機的に組み立てられたカリキュラムこそがカリキュラムと言えるのであって、従来のカリキュラムは教える内容が組織的に吟味されないままの授業の寄せ集めであったといえる。そこで、今回の研修会では、各学部・研究科において教育改善のFD活動に携わっている先生方と大学教育センターとが一体となって、GP、CUM、シラバスを再点検し、GPを満たすようなカリキュラムを各学部・研究科で組織的に考えるきっかけにするために開催した。

3. 一貫した学士課程教育の再構築とCUMの改訂

（1）教養教育GPの設定

山口大学では、学部のGPに加えて、教養教育におけるGPを定めている。教養教育のGPは、日本語、情報科学、外国語、人文社会科学、自然・応用科学、健康科学、学際領域という7つの学問分野の横への広がり、それぞれにおける到達度を規定するものである。

山口大学の教養（共通）教育のカリキュラムの見直しや改訂はこの教養教育 GP の趣旨に沿って行われている。

（２） 教養教育 GP と従来型 CUM との融合

現状の学士課程教育は、実質的には共通（教養）教育と学部の専門教育が分離した形で実施されており、また、教養教育と専門教育の関係は学部によっても違いがある。特に現状の CUM は各学部が作成した関係から専門教育を中心とした構成になっていて、必ずしも一貫した学士課程教育を念頭に置いたものになっていない。そこで、上記の教養教育 GP を CUM に取り込み、一貫した学士課程の形に改訂する必要があることを教育改善 FD 研修会の中で説明した。また、この作業を推進するために大学教育センターがその雛形を示し、各学部はこれにしたがって CUM の改訂作業を行った。改訂された新 CUM は今後一貫した学士課程教育を構築し、教養・共通教育の在り方を検討するための出発点にもなる表であるので、両者の接続や関係を意識しながら作成するように各学部に依頼した。

4. 一貫した学士課程教育の質保証のための 2 つの方法

今回の研修会で学部を回って改めて気付いたことであるが、科目の選択の幅や履修順序の自由度に対する考え方に学部ごとに 2 つの大きな相違があることが分かった。一つは理系学部・学科のように 1 年次から科目間の順序性や関連性を重視して年次を追って順番に科目を積み上げていくことによって GP を達成していく系統（以下理系系統）と順序性や関連性はある程度は重視するが、それよりはむしろ学生の興味・関心に応じて、科目の選択の幅や履修順序の自由度の高いカリキュラムを編成している人文系や経済系の学部・学科のような系統（以下人文系統）の 2 つの系統があると考えられる。したがって、一貫した学士課程教育の質保証を行っていく場合には、この 2 つの系統に応じたそれぞれ異なった質保証の方法を考える必要がある。

上述したとおり、教員が独自の授業を展開するだけでなく、誰が何をどこまでどのように教えるかという科目間の相互連携を教員間で相互理解し、各自がそれを踏まえた上で自らのシラバスを作成することによって質保証を行う。そのためには、科目間の順序性や関係性を明らかにするために CFC の作成や CUM の改訂を行うという方法はいわゆる「カリキュラム面」からの学士課程教育の質保証を行うことに他ならない。この方法は理系系統の学部における一貫した学士課程教育の質保証を行う際に適した手法であると考えられる。

一方、科目の選択の幅や履修順序の自由度の高いカリキュラムが多い人文系や経済系の学部・学科では、学問分野の特性により、必ずしも CFC のようなモデルが有効でない場合もあることが分かった。この場合には、学生個別に学習内容と GP 達成状況を記述した学習ポートフォリオ（以下 LPF）の活用が考えられる。LPF は演習・実習中心や GP 達成における卒業研究の比率が非常に高いカリキュラム等を取り入れている学部・学科・コースでの学士課程教育の質保証の程度を測定する際に有効的な方法である。これはいわゆる「学生個人の面」からの学士課程教育の質保証を行うことができると考えられる。

一貫した学士課程教育の質保証を図って行く場合には、教養教育 GP を含んだ CFC や LPF の作成を通して、「カリキュラム」と「学生個人」という両面から各大学が当該学部・学科のカリキュラムの編成方法に応じて使い分けていくことが重要なことが明らかになった。